

# 「ままごと」の新聞

newspaper of  
mamagoto

第3号

「ままごと」の新聞は、柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が不定期に発行する活動報告紙です。  
発行日：2012年9月28日  
発行元：ままごと

「街と演劇」

## 夏の終わりに、『朝がある』

柴 幸男 Yukio Shiba

DTMで作業した。音を家で作るのは『復讐かつ連続』以来で、懐かしいような、新しいような気持ちで、あのときは、本当にひとりきりだったことを思い出す。内山（ちひら）さんはいただけ。

た。僕の観たいものを、僕はつくれた。受け入れてもらえれば、素直にうれいし、ダメでも、悔しいのとはまた違う感情だった。単純に自信を持って上演できたということだと思っ

夏も終わりにさしかかって、『朝がある』を思い出す。この夏、僕は3つの作品に関わった。『けきしょう（のお）さん』、『横浜借景』、そして現在も稽古中の『ファンファーレ』。これらの作品は、今までは、少し違う雰囲気を持っている。たぶん僕は、変わりつつある。作品や、人への関わり方が、変わりつつある。僕はその変化をたぶん予感していた。だから、変化がやってくる前に、僕は、『朝がある』という作品をつくりたかったんだと思う。いま、あのとき、自分が何をしようとしていたのか、考えてみる。

のスタッフたちの力で出来上がっている。力だけでなく、アイデアも集約されている。だから、もう少し正確に言えば、自分ひとりの妄想を、自分ひとりの判断で、作りたいと思っていた。力を借りるときは、誰の、何の力を、いつ借りるのか、ひとりよがり判断する。そうしたら、うが面白くなる、という確信ではなく、そうしてみて、果たして、どうなるのか、どれほどのものか、知りたい。自分で自分を測る作業をしたかったんだと思う。

閉塞的な、すべてをコントロールしたいという、欲求が、空気が、僕の作品や、稽古場や、ワークショップには、よく漂う。それで良い作品ができたこともあるし、ダメだったこともある。コントロールできる領域が少ない俳優に僕はよく苛立った。その領域を拡張する作業が稽古のほとんどを占めることもあった。大石将弘は、僕の演出指示に、短時間で答えてくれる存在だ。彼に、すべての時間を注ぐ。彼が練習してできることは、できる。できないことは、できない。そう認識した。彼をどう動かすのか、どうしゃべらせるのかだけを、考える。これほど単純なことはない。結果はつねに、彼が、僕ら、だり、苛立つたりする必要はない。ずっと冷静に対処するだけ。稽古時間が朝だったこともあるけど、ずっと清々しくいられたと思う。

同時に、僕は、こんなふうに、ひとりきりの妄想でつくり続ける限界を感じた。大石将弘がやった以上に分解能を増やしていても、しよがなと思った。たぶん、そんな作品をつくりたくなるのは、もうすこし時間が経ってからだと思う。そして、いま、僕は、他人の妄想を利用すること、他人に奉仕することに、面白さを感じている。それは、あきらかに『ファンファーレ』の影響があると思う。

『朝がある』はひとりきりで作りたいと思っただ作品だった。当たり前だけど、舞台はひとりでは作れない。朝があるも、出演した大石（は）本、本当にひとり演じきったけど、や、たかさん

だから、下手くそな鍵盤を弾いて、音楽も自分でつくった。作曲は、ひとりの限界を早々に感じたので（この限界を知ることが重要だった）、稽古場のみんなに協力してもらってメロディーをつくり、それを家に持ち帰って、

そして『朝がある』は、僕にとって、とても愛おしい作品になった。公演中は、いつもうれしかっ

舞台に他人を取り込んでいきたいと思うと同時に、戯曲だけの作品をつくりたい、と考えている。演劇のタネが内在している文字だけの作品。僕は、それを立体化することに今は、興味を持たない。誰かに好き勝手に上演してもらいたい。誰にも上演されなくても、存在してれば作品だと言える、そんな戯曲を、自分の作品として書きたい、今は、考えている。



雨の公園 稽古場へと続く道



稽古場の横で亀が産卵していた



手前の広場で遊ぶ幼稚園児たち



稽古風景、右に大石将弘

Yukio Shiba

82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に『ドドミノ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年『わが星』にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞、同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

from 三鷹



## イメージの作り方

山本真希

『朝がある』の稽古場から撮りたいです。という私の提案を快く引き受けてくださった柴さん。稽古は本当に朝が早く、8時半から始まっていた日もあった。井の頭公園のわきにあるそこは、光にあふれ、言葉にあふれ、動きにあふれ、まぶしすぎるその一瞬一瞬を逃したくなくて、カメラを回し続けました。小屋入りして、本番が始まってからも変わらず続ける日本。柴さんは、大石さんがせりふを言っている上にとんとん被せて演出します。とにかく止まらな。それを聞き漏らすことなく対応する大石さん、どんな脳の作りになっているのかさっぱり分かりません。

いまだ編集中の『朝がある』記録映像ですが、今回大石さんが助演男優賞を獲得することを考えて編集しています。主演女優賞は「彼女」。見えない彼女の存在、朝、街の空気をいかに出すかはなかなか難しい課題です。映像のカット一つの長さで、観ている人が空間に物をイメージできるかどうかが変わってきます。舞台は、そこが家にも宇宙にもなる空間の変化が伝えられるから面白い。それを、映像ではどう生かせるのか。

ここは、布団の中。じゃなくて道の真ん中。なんて素敵な言葉なんだろう。映像監督の私にはとても出ないフレーズです。

やまもと・まき

CMディレクター。『わが星』からの柴ファン。舞台と映像の融合について日々脳内で撮影、編集を繰り返している。ままごととの映像監督コンペをきっかけに『朝がある』の創作現場に参加。

# 「ハートのジョー」 vol.03

## 宮永琢生 〔制作〕

「来場いただいた方も、気に掛けていただいた方も、「え、やってたの?」という方も、皆さん「朝がある」本当にありがとうございます。愛してます。まちで。いやまちで。さーいつの間にやら夏も終わりますね。今年の夏は「横浜借景」やったり、音楽劇「ファンファーレ」の稽古したり……なつやすみはーっ! おれのなつやすみはーっ! ま、毎日なつやすみみたいなもんですけど。そんなこんなで、今は三軒茶屋通いの毎日です。三茶の飲み屋に詳しくなりました。いえーい。



新川忠 『sweet hereafter』

夏になると必ず引っぱり出して聴いてる、個人的な愛聴盤。曲名のThe Miracles「I'll try something new」のカバーからトリビカル200%増量。細野晴臣を想起させつつも、オリジナルの南国サウンドを生み出すその手腕は天才的センスを匂わせる。彼の曲を聴くのは、やはり夏の夜がいい。再生ボタンを押して彼のスイートメロウサウンドが流れたら、南国の風が貴方の頬をそとと撫でて、目を醒れれば見えてくる満天の星。なんちゃってDoris Day「It's a lovely day today」のカバーも秀逸。まさにトリビカルダンディー。現在は表立った活動はしてないようですが、myspace(※)でたまに新曲を更新したりするみたい。ちえき。

www.myspace.com/tadashi-shinkawa

## 「いわきのこと」第3回

### 端田新菜 〔俳優〕

2011年、震災の影響で中止が決定された『わが星』のいわき公演は、いわきアリオスの今尾さんやいわき総合高校のいしさんのご尽力の末、公演+地域の演劇部員対象ワークショップ開催という形で2011年6月に実現しました。そこでわたしは80名の高校生と出会いました。

\*\*\*

2011年7月9日土曜日、高速バスと常磐線乗り継いで、わたしは「いわき地区高校演劇部合同発表会」を鑑賞するため、再びいわき総合高校を訪れました。この日の発表は、岩城桜が丘高校いわき総合高校、平商業高校、勿来高校、岩城高校の5校。前日に発表を終えていたいわき光洋高校と小名浜高校の発表が観られなかったのは残念でした。

学校について、受付や場内誘導をしていた光洋、小名浜の演劇部員たちとの一月ぶりの再会を喜びつつ、客席に落ち着いて、もうまもなく上演が始まるという時に、少し長くて強い揺れがありました。6月に訪れた際も震度5強の強い揺れと、いくつかの小さい揺れを体験しましたが、どうにも慣れるものじゃないですね。ぎゅうぎゅう客席でじっと、いわきの方たちと揺れがおさまるのを待ちました。幸い避難はせずに済み、上演が始まりました。

「来てよかった」と思いました。進学を理由に福島を離れる、一年後のいわきの高校生を描いた話。原発事故の影響で中止になった字

園祭を取り戻す話。父と二人暮らしの男子の情けない恋の話。今年の春は震災の影響で部活もままならなかったけど、将来的に全員が夢が叶う話。家族が思い合いながら大喧嘩ばかりする話。

3月の地震で生活が一変し、学校生活もなかなか軌道に乗らない中、ようやく始まった部活動で仲間取りに取組んだ彼らの舞台から立ち上がったのは、「怒り」と「夢見続ける力」、そして「2011年7月の、いわきの高校生の姿」でした。発表会終了後、泣きすぎて顔が真っ赤で恥ずかしくてニヤニヤしているわたしにいわき総合高校のいしさんみちさんから、「うちの作品、県外でやりたいんだけど……」と言われました。わたしは「分かりました」と言って、東京に帰りました。県外からこの発表会を観にいったのは、わたし一人でした。(続く)

Nina Hashida 京都府出身。青年団所属。2011年、ままごと加入。五反田団、ハイバイ、チエルフィッシュなどにも出演。



2011.11撮影・お行儀のいい総合高校の演劇部員

## 「わたしの履歴書」三枚目

### 大石将弘 〔俳優〕

わたしの履歴書に、演劇の活動歴が一つ追記される。2012年7月。僕は舞台に立っています。ひとり。どうしてこんなことになっているのか、と呆けながらいつだって、ここにあるものが、最適であることばかり。仕事も、恋愛も、家族も、生活も、社会も。たまたま、選択可能な範囲から選べばいいものが、そこにあるだけで、世界をすべて検証すれば、最適解はほかにあるのかもしれない。と思いつつ。

だから、いま、身の周りがある環境や、目の前にいる人は自分にとっておそろく最適ではなく、同様にこの環境や、目の前の人にとって、自分はおそろく最適ではない、のでしょうか。と思いつつ。

いまここにいるのは自分である必然はなく、ないのでしょうか。いま、っていう、この一瞬に、この環境やこの人たちの目の前に、自分がたまたまいるっていうことは、生まれた時から続く、あるいはもつと向こう、無限遠から続く、無数の選べばいいもの重なり合わせの結果、たまたま一つの、いま、っていう解なのであって、それが最適ではなくても、別に自分じゃないくてもいいはずの場所に、たまたま、自分がいるっていうことを、運命と呼ぶのかどうかは分からないけれど、信頼しておきましょう、と思いつつ。

無数の、願いと、言葉と、行動と、打算と、妥協と、能動も受動もありません。選択によって、いま、ここにこうしているのだなあ、とか呆けていた2012年7月、ままごと「朝がある」、終演しました。

Masahiro Oishi 奈良県出身。2010年、ままごと加入。マームとジプシー、田上ハル、gなどにも出演。

**NEXT**

■柴幸男  
【脚本・共同演出】  
『ファンファーレ』  
2012年9月28日[金]-10月14日[日]  
@シアタートラム  
2012年10月20日[土]・21日[日]  
@三重県文化会館 小ホール  
2012年10月26日[金]・27日[土]  
@高知県立美術館 ホール  
2012年11月3日[土・祝]・4日[日]  
@水戸芸術館 ACM劇場

■大石将弘  
【出演】  
NODA・MAP『エッグ』  
2012年9月5日[水]-10月28日[日]  
@東京芸術劇場 プレイハウス  
toi presents 6th  
『あっこのはなし』  
2012年12月中旬  
@STスポット

**編集後記**

第3号の準備は、『ファンファーレ』稽古中の柴さん、NODA・MAP『エッグ』本番中の大石さんにご無理をお願いして進められました。夏休みの宿題のごとく、それぞれにコラム執筆、がんばりました! 次回、第4号もお楽しみに。(熊井)

企画・編集=ままごと  
構成=熊井玲  
デザイン=西山昭彦

## 「四色の色鉛筆があれば」DVD再リリース

女優・黒川深雪と、ままごとの宮永琢生が結成する演劇ユニット「toi」。

同ユニットの旗揚げからたびたび作品を提供している柴幸男が、2009年に発表したtoi presents 4th『四色の色鉛筆があれば』のDVDが、再リリースされた。

『四色〜』と言えば、『反復かつ連続』や『あゆみ』など、柴の初期代表作が詰まったオムニバス作品集。それゆえに、再リリースを求める声も高かったが、その期待に応えるべく、特典映像とライナーノーツ付きという太っ腹な内容での再登場となる。

ライナーノーツには、黒川と宮永の対談、柴の『四色〜』稽古日記が。特典映像には、07年に上演された『反復かつ連続』と、08年上演の『あゆみ』の舞台映像が収録されている。柴の創作の軌跡が分かる貴重な一枚。初版をお持ちの方も、ぜひもう一枚!

発売元: HEADZ 2,000円(税込)  
\*HEADZのHP・ヘッドホン (<http://head-phone.in/>)にて発売中

四色の色鉛筆があれば  
2009年12月25日(金) 20,000円(税別)  
作・演出: 柴幸男

収録内容:  
1. 四色の色鉛筆があれば (全編)  
2. 四色の色鉛筆があれば (メイキング映像)  
3. 四色の色鉛筆があれば (ライナーノーツ)  
4. 四色の色鉛筆があれば (対談映像)